

# 白金霞

八月号



平成25年8月発行 第30号

## 白金葭定例句会案内

九月二十日(金) 12:00~15:00 (アビスター第三学習室)

兼題:十五夜、胡麻

十月七日(月) 武藏野吟行(箭弓稻荷と吉見百穴)

東武東上線東松山駅 10時10分集合(池袋9:15発)  
十月十八日(金) 12:00~15:00 (そば治二階昼食込)

兼題:落花生、御命講

十一月十五日(金) 12:00~15:00 (アビスター第三学習室)

兼題:立冬、朴落葉

十五夜、胡麻の参考句 (九月二十日分)

ふたりしてちがう十五夜見ておりぬ

一満月一鞶靼の一楕円

山本悦子  
加藤郁乎

一瞬の名月に雲岩戸めく

梅木醉歩  
南喬穂

万骨を野晒にして今日の月

山菅恵子  
鹿又英一

十五夜に寝静まる屋根続きけり

河野胆石  
小澤實

十五夜の鼻先にある薬壺

美濃部多津子  
吉田飛龍子

名月や人の名利も塵のごと

山田哲夫

ごま和へのごま一粒も僧の汗

君胡麻播れ我擂鉢を押さへゐむ

寂れたる駅前広場胡麻を干す

鶏が横切り胡麻を干す老婆

月例句会報(13/8/15 9名 蓮見舟吟行)

飯田孝三

怖おづ怖おづと舳先紅蓮白蓮はちす

蓮叢出で凱風のエンジン音

猪の鼻もありたる象鼻杯

水煙草煙管もありて象鼻杯

従兄先生兄も征つたまま蟬の穴

増田陽一

青鷺のひとつ渡りて沼静か

破れ傘の如く鶴のゐる終戦日

玉音と蟬遙かなり蓮見舟

荷葉酒の宴にとび込む銀やんま

蓮見舟船頭はもと舟大工

増田悦子

私乗れば少し沈むか蓮見舟

葉にとまる蜻蛉はなる蓮見舟

蓮の茎混みあひ蜻蛉見えかくれ

光成高志

田宮敦子

エンジンの唸る中にて終戦日

杭に立つ川鵜の黒さ終戦日

象鼻杯母衣の上まで杯上げて

棹でゆく静寂の時の蓮見舟

沼尻の田圃に来れば雪加鳴く

光  
みち

先をゆく子どもばかりの蓮見舟

三人も隔てて注ぐ象鼻杯

青鷺の一羽空占む終戦日

盆の車渋滞の橋舟潜る

切り取りし蓮葉萎れる残暑かな

松村幸一

象鼻杯盃造り花鉄  
蓮の花竿操る老船頭  
四阿の煙草の煙やいと花  
終戦記念日手賀沼の橋渋滞中  
バイアスロン練習中や夏つばめ

仲元興正

手賀沼の秋風に会ふ坂の町  
蓮浮葉水三角にたまりけり  
蓮見舟蓮見のあとを走りけり  
手賀沼の精靈とんぼつるみをり  
稻の香や日は平らかにかげらずに

佐藤宏之助

一管を伝ふ甘露や蓮の酒  
光り吐きつつ花が来る蓮見舟  
混み合つてはちす肩打つ舟路かな

生きること飽きても八月十五日

見つべきは見たり八月十五日

炎天下真直ぐの道ひた歩く  
舳で蓮を搔き分け蓮見舟進む  
蓮沼を抜けエンジンを轟かす  
廃橋の欄干葛の絡みみて  
夏草の中に一条獸道

選句結果  
(数字は入選数)  
左添書きは添削句)

幸一 高志 陽一 高志 陽一 陽一  
正興 みち 敦子 陽一 高志 陽一  
一興 一陽 一高志 一高志 一高志

青木啓泰

蓮沼を抜けエンジンを轟かす  
沼尻の田圃に来れば雪加鳴く  
荷葉酒の宴にとび込む銀やんま  
廃橋の欄干葛の絡みゐて  
象鼻杯母衣の上まで杯上げて  
猪の鼻もありたる象鼻杯  
炎天直下真直ぐの道ひた歩く  
炎天下真直ぐの道ひた歩く  
蓮の花竿を操る老船頭  
見つべきは見たり八月十五日  
生きること飽きても八月十五日  
蓮見舟蓮見のあとを走りけり  
蓮叢出で凱風のエンジン音  
蓮浮葉水三角にたまりけり  
天の川佐渡の真下で鰯が釣れ  
切り取りし蓮葉萎れる大暑かな  
切り取りし蓮葉萎れる残暑かな  
私乗れば少し沈むか蓮見舟  
終戦記念日手賀沼の橋渋滞中  
従兄先生兄も征つたまま蟬の穴  
盆の車渋滞の橋舟潜る  
先をゆく子どもばかりの蓮見舟  
蓮の茎混みあひ蜻蛉見えかくれ

幸二敦子 興正孝三 興泰啓三 孝子敦子 みち みち みち みち

夏草の中に一条獸道

銀漢をつなぎて出たは螢かえ

稻の香や日は平らかにかげらずに

水煙草煙管よりどり象鼻杯

水煙草煙管もありて象鼻杯

四阿の煙草の煙やいと花

葉にとまる蜻蛉はなるる蓮見舟

光り吐きつつ花が来る蓮見舟

白布を被つて行けと広島忌

舳で蓮を搔き分け蓮見舟進む

混み合うてはちす肩打つ舟路かな

バイアスロン練習中や夏つばめ

フランスのコップは桃色理髪店

とりあえずコップに金魚祭り果つ

三人も隔てて注ぐ象鼻杯

## 一句鑑賞

### 玉音と蟬遙かなり蓮見舟

陽一

光成高志

みち

### 青鷺の一羽空占む終戦日

みち

玉音放送を蟬の声とともに聞いたあの日、終戦日、いや敗戦日は遙か昔になつてしまつた。蓮見舟に乗つて蓮見に向う往路の感慨。或は蓮見を終えてエンジン音の中を帰る沈黙の中での感慨。「遙かなり」は蟬の声が沼の岸边から遙かに聞こえ来ると一読とつたが、「玉音と蟬」と

宏之助

啓泰

興正

孝三

敦子 悅子 幸一

啓泰

宏之助 幸一

敦子 啓泰 リ

### 荷葉酒の宴にとび込む銀やんま

陽一

「蓮を見に来て荷葉杯象鼻杯」(山田圓子)を後述してあるが、蓮の葉で飲む酒即ち荷葉酒を楽しんでる宴に銀やんまがとび込んできた。あらまあ銀ちゃんが来ちやつた、まあどうぞというまもなく飛びすぎちやつた。宴と書いてあるから、宴だけなわに飛び込んだに違いない。

### 怖おづ怖おづと舳先紅蓮白蓮はちす

孝三

「舳で蓮を搔き分け蓮見舟進む」(宏之助)と紅蓮が現れ、また進むと白蓮が現れる。蓮叢の中から怖ず怖ずと舳先に現れる。終戦記念日のこの紅蓮白蓮は戦没者の御靈に違いない。

蓮見舟が出て沼中央の手賀大橋を潜り、蒲叢に沿つて進んでいる時、前方に青鷺が悠々と飛びすぎた。急に現れた。羽を一杯広げその端部が黒く縁取られていた。一羽であつたけれど、空を独り占めした如くに思われた。B29の大きな翼が通り過ぎていった記憶が甦つた。「あつ白鷺」という声が聞こえて一瞬沈黙が流れたのはその記憶が呼び覚まされた瞬間だつたのだ。

## 手賀沼の精靈とんぼつるみをり

興正

精靈とんぼは、盆の頃に飛ぶ赤とんぼを云う。祖靈が

このとんぼに乗つて帰つてくるのだ。その精靈とんぼとて子孫を残すための嘗みは、人間様の勝手な思いにかかわらず行われる。手賀沼の蓮見に来ている雅客さまよ、そんなことは知つたことかよとつるんでいるのである。

## 見つべきは見たり八月十五日

幸一

平家物語の平知盛の「見るべき程の事をば見つ。今はただ自害せむ」とて、碇を担いで壇の浦に仰向けに入水した歴史を踏まえての、ちゃんとこの句は、昨年暮れに投句され、私が取つて鑑賞した。今回の「見つべきは見たり」の措辞は、「碇知盛」の心情になぞらえて、終戦の八月十五日に私は碇知盛になつたのだ、その後の人生はこの世とは思われず、うたの世を生きてきた。この世のまことの断絶がかかる八月十五日である。うたのまことに居られる幸一さんの真摯な告白ではないだろうか。

## 炎天下真直ぐの道ひた歩く

宏之助

一読、宏之助さんの句とわかつた。故に選んだわけでは

はない。炎天下の真直ぐの道をひたすら歩くのは作者である。遍路姿の作者である。所用で歩いているわけではない。己のために歩いている。ひた歩いている。そこに人生がある。俳句修行のために歩いていると理に走ると途端に面白くなくなる。君子は己のために歩くのだ。

## 一句鑑賞 × (29号分)

武者昭七

### 深海の如くに夜のプールあり

陽一

明るく陽気な昼のプールの裏側が秘めている夜のブルサイドの不気味な「素顔」をとらえて見事。さざ波ひとつ立てず静まり返つた昏い水の分厚い深みに、光も届かぬ「深海」をみたのは作者の鋭い感受性のせいでしょう。何よりも「深海」という昏い重たい言葉の響きが妖しいイメージを搔き立て昼のプールにはない確かな存在感を突き付けてくる。さまざまな語りがいのように実は水は怖ろしいものなのだ。地面をわずかに掘りくぼめただけの水たまりにも水の魔性が潜んでいる。夜のプールは深海のように深く黙してそれを語らないけれど。それは水の「孤独」もある。

### 百姓のほつたらかしの甜瓜

高志

眞桑瓜はメロンの仲間だというけれどメロンのイメージが急上昇するにつれて逆にさえいものになつてきてしまつたらしい。

### まくわうりどんな味かと母に問う

正美

とあるとおりどんな味かを知らぬ者、忘れてしまつた者もおおいだろう。作者のように作り手にさえ「ほつたらかし」にされてしまつた瓜に同情の目を注ぐのは甘味にも縁遠かつた昭和世代だからだろうか。ああ、もつたい

ない！あゝかわいそうに！

### 虎の尾の日に染む白さ佇めり

この花、道端でも花壇の縁でもよく見かける。恐ろしげな名前に對してその花は可憐である。白色のほか桃色すみれ色などがある。「日に染む白さ」で一旦休止して花の白さの鮮やかな印象をいい、「佇めり」と続けて花に注ぐ作者の愛憐のこころをいう。

### 一句鑑賞（29号分）

飯田孝三

#### プールぢゅう蛙泳ぎの授業中

みち

句会添削句は「プールぢゅう蛙泳ぎの授業かな」。それはそれで端整な仕上がりだが、原句を取り上げてみたい。プール「ぢゅう」は「中」。「充」に通じる。プールいっぱい、一面の意。授業「中」は「最中」、真盛り。「ぢゅう」、「中」と連ねる字面、口誦が相刺、四濁音もあって、プールの賑わいが手にとれ、泳ぎ手の手捌き、足捌きのさまが目に見える。「蛙」泳ぎ（平泳ぎ）がいい、他の泳法ではこうはいかぬ。四肢の屈伸が見え、その間合いがいのち、即ち臍と知る。やっぱり俳句は蛙か。むべ詩心、閃きの賜物だろう。「授業中」の動名詞的表現がもたらす映像の動的効果が見どころ。「ぢゅう」、「中」の用字使い分けも納得。

「ころごろとたてよ」にあり甜瓜

悦子

畠の隅か、台所の土間か縁の端か、まるで甜瓜は置き忘れ。昭和も三十年代頃までは（大都市を除けば）よく

見かけた光景である。「ころごろ」「たてよこ」の無造作ぶりが、目に物見せて面白い。当今は「甜瓜」といつたて知りやしない、売つてもいない。○○メロン、△△メロンとやら、手間隙かけ、育て、出荷するまでの気配りは、およそ想像の外のようだ。甜瓜の自然の味がなんとも懐かしい。故郷のはらから、友垣の顔が目に浮ぶ。

「たてよこに富士伸びてゐる夏野かな」（桂信子）より、街いも拵えもない。ちなみに信子句、広々とした裾野から夏富士の全景を見上げる図と思いきや、上空から鳥瞰する景だという（長谷川櫂）、腑に落ちぬ。いやはや、ついつい余談。

#### 甜瓜昭和と吾等滅びたる

陽一

昭和は長い、曰く激動の時代。されど今や、戦前はおろか、戦中、戦後の焼跡を知る者は、日々に少数。国民の多くは、甜瓜の名も味も知らぬ。戦中、戦後復興期に青少年期を過ごした「吾等」にとつて、動員作業やあそび疲れで腹へらし、汗まみれで口にしたほと青さが匂う、甜瓜の瑞々しさは忘れ難い。甜瓜は昭和の味である。さりながら、蓋し今は昔。

## 百姓のほつたらかしの甜瓜

高志

末生りの真桑瓜は、極度に味がおちる。畠の片隅に放つばられ、見向きもされない。往時、よく見かけた晩夏の瓜畠風景である。そんな真桑瓜に目を注ぐ。いづれ土に還され畠の肥やしか、家畜の餌にされただろう。ナニ、子猪の餌？ フーム。とまれ、近時、フレーム栽培の改良種ではこんなことはありえまい。昭和の産土を思い、げに瞬きの間の感を深める。「デ、パ地下ノドコ見テモナイ甜瓜」（三泥）。（選句結果欄掲載順）（平25・08・09）

## ハガキ句三十一報（07／11／7）

冬雲雀朝の菜園見まはれば

高志

名月や雲に遊びて松葉町

高志

人肌の杯もてあそぶ無月かな

高志

十五夜の出でて没日の嚇々と

高志

道の辺に瞽女の墓あり翁の忌

高志

夜氣ひそか青き棗を頂きぬ

高志

持ち寄つて秋の七草揃ひけり

高志

新しき友得て七つ棗の実

高志

桶のまま句座の真中に藤袴

高志

良き顔の揃ふ良夜の一会かな

高志

末生りの真桑瓜は、極度に味がおちる。畠の片隅に放

高志

つばられ、見向きもされない。往時、よく見かけた晩夏

高志

の瓜畠風景である。そんな真桑瓜に目を注ぐ。いづれ土

高志

に還され畠の肥やしか、家畜の餌にされただろう。ナニ、

高志

子猪の餌？ フーム。とまれ、近時、フレーム栽培の改良

高志

種ではこんなことはありえまい。昭和の産土を思い、げ

高志

に瞬きの間の感を深める。「デ、パ地下ノドコ見テモナイ甜

高志

馴れぬこととして身のきしみ行く秋ぞ 妙子

高志

「見まわれば」がうまい。その呼吸は、子規の「柿食へば」に敵い、一瞬を捉え、かつ、間合いがこもる。

高志

ゆつたりしたリズムは、上五へかえり、大空を深々と抱える。晴れやか、雲雀の声ひびく小春の空である。「朝の」

高志

がさりげなく、利いている。

高志

## はがき句報三十一号管見

冬雲雀朝の菜園見まはれば

飯田孝三

高志

「見まわれば」がうまい。その呼吸は、子規の「柿食

高志

へば」に敵い、一瞬を捉え、かつ、間合いがこもる。

高志

ゆつたりしたリズムは、上五へかえり、大空を深々と抱える。晴れやか、雲雀の声ひびく小春の空である。「朝の」

高志

がさりげなく、利いている。

高志

「人肌」の温もりと「無月」の照応がにくい。

高志

節酒、無聊の思いか。「盃」ならぬ「杯」は、象形にかかる作者の美学だろう。白雄の「人恋し」に更に艶を加える。

高志

なめらかな調べにあつて母音アア、ウウ、アアの連音、とりわけ中七下五を繋ぐ「くぶむ」が、三濁音の韻と

高志

あいまつて無聊を深める。

高志

「人肌」の温もりと「無月」の照応がにくい。

高志

節酒、無聊の思いか。「盃」ならぬ「杯」は、象形にかかる作者の美学だろう。白雄の「人恋し」に更に艶を加える。

高志

なめらかな調べにあつて母音アア、ウウ、アアの連音、とりわけ中七下五を繋ぐ「くぶむ」が、三濁音の韻と

高志

あいまつて無聊を深める。

高志

「松葉町」は実在の名だろうか。ともあれ、月を浮か

高志

べる松のたたずまいや梢のさまが目に見える。「や」がぴたり。「て」がさらりとぬける。

### 十五夜の出でて没日の嚇々と

敏子

満月は早々に昇る。中秋、真東に月は澄み、日はまだ懸り、嚇々と真西の空に沈む。没日の赫さが目にしめる。人曆・蕪村は、初春の天地を東西にふり返つたが、作者は中秋の日月を見返る。前者は望見の遠眼差し、後は直視、距離感が消える。「嚇々と」を敢えて言うのは、そこが眼目。前は情趣、後はより精神性が強い。「て」が時間の推移を伝え、もたれない。渉る日の軌を暗示する。没日に何を惜しむのだろう。ただ、「出でて」の「で」は不要ではないか。字面が重くなる。

### 夜氣ひそか青き棗を頂きぬ

春美

棗の実は思いの外小粒。「ひそか」に納得。「青き棗」が印象的である。「ひそか」に「ぬ」と呼応、「頂きぬ」に秘める思いを收める。力行音とりわけ「き」二音の韻きに思いの深さがこもる。

### 道の辺に瞽女の墓あり翁の忌

敏子

偶々、芭蕉忌日の旅の囁目だろうか。上中下、つき過ぎないか。虚子「春遍路」の先蹤があるのが損。「道の辺」は道端より広がりを感じさせる。

### 持ち寄つて秋の七草揃ひけり

たか子

「揃ひけり」が外連味なさがいい。めでたい。

### 新しき友得て七つ棗の実

多佳子

「七つ」はめでたい。「くななつなつ」の弾みがいい。

### 桶のまま句座の真中に藤袴

白木

情景が見える。「真中」できめる。

### 良き顔の揃ふ良夜の一会かな

和子

「良き顔」が見えるようだ。「一會」は「一期一會」のそれだろう。去り難てに散会したにちがいない。

### 馴れぬことして身のきしみ行く秋ぞ

妙子

「ぞ」に実感。

### 送電線ゆるき弧を描く無月かな

妙子

「描く」は冗語。以上、妄言多謝。

先のファーブル会ではお世話になりました。歓談できず残念でした。当日の「庭石の裏より聞こゆ鉦叩」はいい。さりげなく深い。脱帽。貴句は、この頃、とみにぬけていい。12月16日は、また、よろしくお願ひします。

(こちらの仲間の句)

### 隊列を外れ叩かれ祭馬

中村美路子

大輪の菊を咲かせて再婚す

水野 清子

百菊のなかの一つの真白なる

田中 勝

三四郎池に突つ込む冬の鴨

石川シゲ子

(平成 19・11・30)

### 葡萄の房まる」と口中アフロ・ディテ

孝三

葡萄の房まる」と口中に押し込むと、口の中はまるでア

フロディテのようである。アフロディテが此句の贋である。簡単に言うと、ギリシャ神話の海の泡（アフロス）から生れた美と愛の女神である。ローマ神話ではヴィーナスに当るから、ボッティエリの「ヴィーナスの誕生」の絵を思い浮かべるであろう。口をもぐもぐさせながら、耽美的世界を脳味噌で味わっている様にかすかなユーモアが漂つて来るではないか。これは高度な諧謔。

（H. 25、8. 10 高志記）

ところで、「はがき句管見」をつづりながら、高志さんと敏子さんの句について、日頃、感じているところを簡単に述べてみたい。

（最近の高志さんの句について）

誓子の句の特質は、即物的、硬質感、マンライク「俳句」である。抑情、默示、自恃が際立つ。有名な「木枯」や「この帆」などよりも、初期の「車輪来て止まる」「溶鉱炉」に誓子の面目を見る。「天狼」本流を自認する主宰クラスより、高志さんの句の方が誓子の正統を受け継いでいる。最近の作は、さらに進化、新境に入った感じがする。

ぼくの記憶する好きな句から、百舌鳥句会の終り頃以後の作十句を限り、左に掲げる。  
二ん月や榛の木にある風の形  
鼈を食つて春夜の別れかな

筍の籠に正立倒立に  
來し方は白朝顔に抜けにけり

白鳥の羽を拾へば汚れをり

白鳥が八百飛来本塙村

狐雨通り過ぎたる秋の声

土筆立つ面影塚の正面に

姨捨の坂の途中の枯柏

水中を伸びて此の世の蓮の花

終四句は、直近の句である。「秋の声」の斡旋、「正面に」「途中の」の措辞、「水中を伸びて」「此の世の」の修辞は、さりげなく、不動。自然自在の風があり、深い。

抜けているのである。

（最近の敏子さんの句について）

敏子さんの句には、綾子の「普段」ぶり、立子の「率直」を思う。勿論、より今日（現代）が息づいている。天性の詩があり、俳諧がこもる。出っぱらず、奥が深い。同じく、百舌鳥句会終期以後から十句だけ掲げる。

鼻と四肢括られて猪戻りけり  
蠟螂の身籠もる腹を連れ歩く

県道を横切るつもり大毛虫  
客人に日の匂ひある風炉手前

爪先の影踏む舞ひや後の月

鉄瓶の小包届く無月かな

燒諸の熱き釣銭渡さるる  
昆蟲記開いてありし春の昼  
納稅期隣の犬の賢くて

会場に沸き立つ拍手五月来る

「県道を」の「つもり」がうまい。この句あたりから、一段の進境を覗う。「客人に日の匂ひ」、「爪先の影踏む」の機微、「鉄瓶の小包」と「無月」響き合い、「ありし」の自然。言わば、藏するものが深い。燒諸の「熱き釣銭」また然り。この句境の類例を知らない。「納稅期」は、又、別の方向だ。ごく最近に、新たに一つの傾向を感じる。一は「納稅期」や右掲外「白鳥帰る」、「願はくはく」など、機知が覗え、軽妙。二は「舟に身を委ね八月十五日」（昼までに戻る八月十五日）のように（季題の重さゆえだろうか）あえて胸うちを読者の洞察に大幅に委ねる。先の吟行句「蟬の穴結んでみれば七つ星」は一の系だろう。（H. 19・9・18 飯田孝三）

本も（今更ですが）わからないことだらけです。時折構造の後輩達と会つてシゲキを受けたり、年齢差を感じたりしています。元気でいます。皆様の益々の御活躍を祈ります。（7. 27 小山陽也）  
おくればせながら、暑中見舞い申し上げます。終戦日の蓮見舟の吟行会、案内ありがとうございました。万障繰り合わせて参加させていただきます。こないだ「平野ひろし」さんと枕をならべて、熊谷支部に参加して来ました。ひろしさんから、このように一緒に泊りたいなど言うことは、めづらしいことなので、これが最後と思つたのかも知れません。（平. 25. 7. 31 佐藤宏之助）

白金葭楽しく拝讀しております。毎号小生の拙い文など掲載して頂き大変恐縮しております。三好達治はそろそろ打ち止めにしようかと思つております。貴誌の益々のご発展を祈ります。（平. 25. 7. 31 武者昭七）

残暑とはいえ、盛夏を凌ぐ暑さですが、お元気でお過ごしと思います。七月例会の後選鑑賞の駄文をお送りします。なにやら、異常気象が年々昂じる感じです。とにかく暑い。ご夫妻ともどもどうぞご自愛のうえ、ご精吟なされますよう念じあげます。蓮見吟行を楽しみにしています。草々（平. 25. 08. 10 飯田孝三）

### お便り広場（到着順、敬称略）

「白金葭」七月号拝受いたしました。充実すると共に格調高い雑誌になりつゝあるやうに感じます。ビックサイトブックフェアに参加されていますね。次回に無料入場券が二枚？手に入りましたら送ります。近頃はチャンとした本を少しは読むやうになりました。そして構造の

上げるのがすっかり遅れまして申し訳ございません。私こと、今年に入つて体調が悪く野火月例句会（私は不忍句会）も欠席投句のみとなり、世話役の〇氏にお手数をかけている次第です。野火は今年五月800号を迎えた様大変に御多忙を極めてをられる申し訳ないことでした。

七月末で予定の検診が終了、やれくのところ、昨夜歯の一本が折れ、今日は12時10分に谷中の歯科医院に予約をとりました。走り書きになつて申し訳ありません。

八月八日はアクロス句会飯田様も御出席頂く予定ですが、白金葭の皆様も大切な蓮見舟吟行ですね。御健吟拝見を何より楽しみ致しております。御執筆陣も多忙にそして何より高志様の編集ぶりと御句の冴え渡りぶり、今は奥様だけでなく高志様のファンになりました。

酷暑もぶり返して参りました。もう一息呉れ／＼も奥様共々お体の御無事をお祈り申し上げます。

八月五日

小澤房子  
白

### 俳窓評論纂

受贈誌（八月号）

電車まう来ぬ真壁駅桜散る

（飛行雲67号）

駿河岳水

涼風をおとどけします。北海道新栄の丘（水彩画）  
くれぐれもおからだおいとい下さい。2013盛夏  
(H25.7.27 德原房代)

光成高志様

山田圓子さんの第三句集「難波津」が出た。平成十四年（二十一）年までの八年間の千句あまりの大部な句集である。後の二年間の句は自選とか。小海線、清里、土肥、殿ヶ谷戸庭園、伊吹山、詩仙堂、蘆花旧居、富士山、熱海、野川公園、子規庵、大國魂神社、山梨勝沼、高幡不動尊、富士ビューホテル、猿橋、善光寺、諏訪湖、道修町、上野牡丹苑、隅田川、靖国、芦屋靈園、龜戸天神、

宮神輿漢（おと）の津波押し出せり（彩20句集） 平野ひろし  
梅漬るダーベル重石代りとし（リ） 鈴木祐  
英字新聞押へに青き模様置く（リ） 宮川喜代子  
百間のノラを呼ぶゑ虎落笛（リ） 村瀬愛子  
水温む三拍子にて米を研ぐ（リ） 山本力枝  
がうがうと雪庇の下を雪解水（リ） 吉村ふみえ  
早春賦口遊みつ朝厨（リ） 和田迪代  
蠣蠣（かき）何も掲かずに大水車（あすか8月号） 山尾かづひろ

### こだま（俳誌交換主宰選句）

飛行雲夏号（67号）駿河岳水主宰抽出

糞ぐもり砂町銀座人通り（25号）

彩五月（111号）平野ひろし主宰抽出

受験生蒸氣機関車にて参る（25号）

養蜂箱開ければ蜂のびつしりと（26号）

光成高志  
光成高志

神代植物公園、那智の滝、万博記念公園、安房の国、江ノ島、東京農工大、大阪御堂筋、羽子板市、新島、箱根、強羅ホテル、浜離宮、初島、父島、河口湖山荘、草津温泉、余呉湖、天城公園、巾着田、伊豆山、大内宿、袋田の滝、仙石原、津山、越後、佐渡、明治神宮、阿波、渡良瀬、長崎、仙台、妙義山、ボロ市、鳥取砂丘、八甲田、吟行されたところを抜き出すと途中まででも以上のように切がない。境涯俳句の骨が通つてゐるが、読んで行くうちに、写生句の良さが滲み出る。句集を読むのは、我慢して親しまなければ、良さが分からぬ。

立秋や七夕さまと重なりて  
稻穂り案山子が斜に立つてゐる  
高きより青松虫が集くなり  
銀杏を拾ふ手元に落ちて来る  
烏瓜蔓の強さよ引けば来る  
山茶花は高所に咲きて花散らす  
朝戸繰る飛生鼠眠り覚まし飛ぶ  
飛生鼠はむささびの當て字であろう。  
赤松に夏の夕日の射し昇る

庭園にパンパスグラス靡きけり

パンパスグラスは我が俳誌の名である。「庭園に白金葭の靡きけり」と同意。「われら俳人白金葭は風の旗」(石原透H. 11)を意識して、白金葭は俳人の旗に相応しいと思い名付けた。「靡きけり」は白金葭の本意に叶う。本誌の表紙の写真がその静止画である。

蛇足を書いてしまつて恐縮ですが、削除せずに進みます。圓子さんの奥様がご病気になられてそれが、気がかりで左のような句を作らされている。

妻病めば心鬱なり梅雨に入る (平19年)

妻病んで葡萄美味しと食べにけり (リ)

妻病めばひと日が永し秋の暮 (リ)

病む妻に目出度くもなし母の日は (平20年)

我が家鬱世も不安なり年の暮 (リ)

寒明けや府中多摩川風の道  
孫曾孫卒寿祝へり遅日哉  
兜虫死んでも兜光りゐる

蓮を見て荷葉杯象鼻杯  
雨水今日吾八十九誕生日 (平19年)  
蔓伸びて豌豆の花咲き出せり  
竹林に夏鶯が響くなり  
青嵐大竹林を抜けて行く  
塩辛蜻蛉岩に蹲ひ温まる

蓮を見て荷葉杯象鼻杯

雨水今日吾八十九誕生日 (平19年)

蔓伸びて豌豆の花咲き出せり

竹林に夏鶯が響くなり

青嵐大竹林を抜けて行く

塩辛蜻蛉岩に蹲ひ温まる

塩辛蜻蛉の句、私も佐久平の春日馬事公苑の池で見た。正直に書く。(塩辛蜻蛉翅伏せて岩頭に)というのがそこで書きとめた私の句。岩に蹲ひという言葉は浮んでこなかつた。温まるもそう。圓子さんの句が温かい。見たままでなく、自分の実感を書いて居られる。

寒明けや府中多摩川風の道  
孫曾孫卒寿祝へり遅日哉  
兜虫死んでも兜光りゐる

初春や病院にゐて妻米寿

(平21年)

年老いし妻病む不安目借時

(リ)

敬老日妻は米寿で鯛戴く

(リ)

燐々と妻は米寿の柚子湯する

(リ)

圓子さんはあとがきに現在のこと過去のことを書かれ  
ておられる。ご自身は九十五歳であられる。現在までの  
三年間の句をお持ちであり、この調子にて、お元気で作  
句され、第四句集を上梓されることを念じ上げます。

### 三好達治を読む

vi

### 武者昭七

さるすべり

さるすべり

くさのいほりの戸に咲きて

ふたつなき日のはるかなる

ながたまづさも灰となる

(駱駝の瘤にまたがつて)

さるすべりは盛夏のころから初秋にかけて、よく茂つて  
楕円形の葉をつけた枝先に、ちじれたような紅色の小さ  
い花を房のように付ける。涼やかな風にゆらいではらは

らじ花の散るさまはなかなかに風情がある。花期が長い  
ので「百日紅」ともいう。

「くさのいほり」は粗末な住まいのこと。咲き誇るさ  
るすべりのわきのささやかな住まい。そのたたずまいが  
住み手の閑雅な心境を伝えている。「ふたつなき日」は今  
は二度と立ち返るすべもない愛の日々。「はるかなる」と  
重ねて遠く過ぎ去つたあの日々への深い哀惜の思いをい  
う。「たまづさ」は手紙・たよりの意味の雅語。かつて交  
わし合つた恋の形見であろう。それをいまさるすべりの  
花の散りしく下で焼き捨てるのである。「な」は汝の意味  
の二人称。

「さるすべり」と冒頭に重々しく五音をすえ、以下七  
五調を繰り返して流麗典雅な短詩となつてゐる。かつて  
恋人のたよりを「ふたつなき日のはるかなるたまづさ」  
というあたりは、払い捨てたはずのその遠いおもかげの  
今もなお時々に胸に迫るものがあることを告げてゐる。  
「さるすべり」はその象徴である。最終行の突き放した  
言いかたに強い「断念」が働いてゐる。

### 芭蕉のかるみ以後 (28)

寛文十二年芭蕉は二十九歳、京より故郷の伊賀上野に

光成高志

帰り、「貝おほひ」を兄の家の釣月軒において自ら書き、これを天神社に奉納して江戸へ下つた。「貝おほひ」の序文、判詞に言う。「小六ついたる竹の杖、ふしぶし多き小歌にすがり、あるははやり言葉のいくせあるを種として、いひ捨られし句どもをあつめ、右と左にわかつて、つれぶしにうたはしめ、(中略) 小うたにも予がこころざす所の誠をてらし見給ふらん事をあぶぎて、当所あまみつおほん神のみやしろのたむけぐさとなしぬ。(貝おほひの序文) 今こそあれ。われも昔は衆道すきの。ひが耳にや。(二番の判詞) うき世五十年。一寸もまだのびぬ。花の枝咲までのあひ遠なれば。先づ目の前の晩鐘寺の。けふの花見こそたうとけれ。(八番) 伊勢のお玉は。あぶミかくらかと。いへる小歌なればたれも乗りたがるハ。断とはりたるべし。(十七番) 京上臘に。ほのじハ。たれも。すき鉄の。かねがねのぞむ事なれど。稻のととのを。持たれバ。我妻ならぬ妻なりと。先まゝ此恋ハさしおくて田たの。(十八番) 温うんのめと(略) 実げにあすをもしらぬ。身なれば能よき亭主ぶりも。うれしくて。(十九番) なま中しぐれへ。いやよ。君がなみだの。雨の。しつぽと。ぬれかけ道者を。(二三番)」

なんと掛け詞や縁語の多いことか。卑猥な連想を誘うような表現を危なかつしいところでさつと引上げている。洒落の呼吸が絶妙である。源氏物語や古今集などの古典

をなんとうまく洒落のめしていることか。このような句合せの形式は、北村季吟(明暦二年)の先例があるけれども、その判詞は美学的、権威的で面白くないのに比べ、宗房の判詞のなんと面白いことか。リズムだつて、その時代の小歌やはやりことばの拍子を損なわないよう、句読点を独自につけているではないか。これは、寛文という時代背景を鋭敏な感受性でとらえた立派な文芸作品だ。長い戦国時代が終り、つい此年から三十五年前の島原の乱を最後に戦乱の世は終わりを告げており、学問、芸術の分野では遅れて戦国時代のような疾風怒涛の時代に入つていたのだ。憂世から浮世となり、浮世狂いの自由を得たのである。封建時代の抑圧から自由な場所と言つたら、傾城町しかない。城を傾け国を滅ぼすという色香をもつてする遊里である。時代全体に遊蕩気分がみなぎついていたのである。貨幣経済の進展に伴う新興町人の台頭もこの時代であつた。貞門から出発した宗房の禅学、歌学、漢学、謡などの独学は、それを突き抜けて「貝おほひ」に爆発したのだ。これは無意識の軽みと思う。

## 我孫子日記

7／28～30\* 佐久平。8／6 京橋。8／8 手賀の丘公園。8／15 手賀沼蓮見舟吟行句会。  
\* 蓼科山(たでしな)も浅間山(あさま)も雲の峰の中

高志

減反の棚田のありて蕎麦播種  
調馬索終へし乙女ら馬洗ふ

道祖神まとふ衣の灸花

青棚田峯に達して峯を越す

五郎衛米作る青田の道走る

どの家も門灯のごと凌霄花

鍬持つは案山子の翁北信濃

## 編集後記

終戦記念日の蓮見舟は恒例の吟行句会になっています。以前より残暑がきつく、猛残暑という言葉があれば、当て嵌めたいような残暑中、蓮見舟は若干涼しさを感じながらの航行でした。句会後のビール歓談中に孝三さんから発せられた句に皆感動して、終戦記念日を修した。

茄子の馬馬一頭も還らざる（孝三）

ハガキ句31報はH. 19年の月見句会の句報である。

その前に孝三さんより高志とみち（敏子）の句についての感想をFAXにていだいていたものを掲載しました。過分のお褒めの言葉をいただいております。気恥ずかしい気持ちがありますが、その時の足跡その時の著者の感想でありますので、そのまま掲載しました。

ハガキ句は、現在新年のみを送っていますので、この俳誌がいづれ追いつくはずです。その日はH. 28年九月

であります。この日を目標に本誌の発行を続ける所存です。

高志 みち リ

みち リ

白金霞八月号（第30号）.. 発行所 我孫子市南新木2-14-17  
編集・发行人 光成高志.. 電話（〇四一七一八七一一〇六八）  
表紙の題字.. 加納綾女。写真.. 白金霞